

長谷川君と余

夏目漱石

青空文庫

はせがわ
長谷川君と余は互に名前を知るだけで、その他には何の接触も
なかった。余が入社の当時すらも、長谷川君がすでにわが朝日の
社員であるという事を知らなかったように記憶している。それを
知り出したのは、どう云う機会であつたか今は忘却してしまつた。
とにかく入社してもしばらくの間は顔を合わせずにいた。しかも
長谷川君の家は西片町^{うちにしかたまち}で、余も当時は同じ阿部の屋敷内^{あべやしきうち}に住
んでいたのだから、住居^{すまい}から云えばつい鼻の先である。だから本
当を云うと、こつちから名刺でも持つて訪問するのが世間並^{せけんなみ}の
礼であつただけけれども、そこをつい怠^{なま}けて、どこが長谷川君の
家^{いえ}だか聞き合わせもせず横着をきめてしまつた。すると間もな

く大阪から鳥居君とりいが来たので、主筆しゅひつの池辺君いけべが我々十余人を有楽町の倶楽部クラブへ呼んで御馳走ごちそうをしてくれた。余は新人の社員として、その時始めてわが社の重なる人おもと食卓を共にした。そのうちに長谷川君もいたのである。これが長谷川君でと紹介された時には、かねて想像していたところと、あまりに隔たつていたので、心のうちでは驚きながら挨拶あいさつをした。始め長谷川君の這入はいつて来た姿を見たときは——また長谷川君が他の昵懇じっこんな社友とやあという言葉を交換する調子を聞いた時は——全く長谷川君だとは気がつかなかった。ただ重なる社員の一人なんだろうと思つた。余は若い時からいろいろ愚ぐな事を想像する癖くせがあるが、未知みちの人の容貌態度などはあまり脳中に描かない。ことに中ちゅう年ねんからは、

この方面にかけると全く散文的になつてしまつている。だから長谷川君についても別段に鮮明な予想は持つていなかったのであるけれども、冥々めいめいのうち、漠然ぼくぜんとわが脳中に、長谷川君として迎えるあるものが存在していたと見えて、長谷川君という名を聞くや否やおやと思つた。もつともその驚き方を解剖して見るとみんな消極的である。第一あんなに背の高い人とは思わなかつた。あんなに頑丈がんじょうな骨こつかく格かくを持つた人とは思わなかつた。あんなに無粹ぶいぎな肩幅かたはばのある人とは思わなかつた。あんなに角張かくばつた顎あごの所有者とは思わなかつた。君の風ふう 丰ほうはどこからどこまで四角である。頭まで四角に感じられたから今考えるとおかしい。その当時「その面影おもかげ」は読んでいなかつたけれども、あんな艶つやつぽ

い小説を書く人として自然が製作した人間とは、とても受取れなかつた。魁偉かゝいというおおげさと少し大袈裟で悪いが、いずれかというと、それに近い方で、とうてい細い筆などを握つて、机の前で呻吟しんぎんして、いそもないから実は驚いたのである。しかしその上にも余を驚かしたのは君の音調である。白状すれば、もう少しは浮いてるだろうと思つた。ところが非常な呂りよ音おんで大変落ちついて、ゆつたりした、少しも逼せまるところのない話し方をする。しかも余に紹介された時、君はただ一二語しか云わなかつた。(もつとも余も同じ分量ぐらいしか挨拶に費やさなかつたのは事実である。)

その言葉は今全く忘れてゐるが、普通にありふれた空虚な辞令でなかつたのはたしかである。むしろ双方で無愛想に頭を下げたの

だつたらうが、自分の事は分らないから、相手の容子ようすだけに驚くのである。文学者だから御世辞おせじを使うとすると、ほかの諸君にすまないけれども、実を云えば長谷川君と余の挨拶が、ああ単簡たんかん至極しごくに片づこうとは思わなかつた。これらは皆予想外である。

この席上で余は長谷川君と話す機会を得なかつた。ただ黙つて君の話しを聞いていた。その時余の受けた感じは、品位のある紳士らしい男——文学者でもない、新聞社員でもない、また政せい客きやくでも軍人でもない、あらゆる職業以外に嚴然として存在する一種品位のある紳士から受くる社交的の快味であつた。そうして、この品位は単に門地階級もんちかいきゆうから生ずる貴族的のものではない、半分は性情、半分は修養から来ているという事を悟つた。しかも

その修養のうちには、自制とか克己こつきとかいういわゆる漢学者から受け襲ついで、強しいて己おのれを矯ためた痕こんせき迹せきがないと云う事を発見した。そうしてその幾分は学問の結果おのずか自らここに至つたものと鑑定した。また幾分は学問と反対の方面、すなわち俗に云う苦勞をして、野や暮ぼを洗い落として、そうして再び野暮ぼに安住していると云うところから起つたものと判断した。

そのうち、君は池辺君と露西亞ロシアの政党談をやり出した。大變興味があると思えて、いつまで立つてもやめない。びび々びび数千言と云うとむやみに能弁にしゃべるように聞こえてわるいが、時間から云えば、こんな形容詞でも使わなくなつてはならなくなるくらい論じていた。その知識の詳しょう密みつ精せい細さいなる事はまた格別なもので、

向つて左のどの辺に誰がいて、その反対の側がわに誰の席があるなどと、まるで露西亞へ昨日きのう行つて見て来たように、例のむずかしい何々スキーなどと云う名前がいくつも出た。しかし不思議にもこの談話は、物知りぶつた、また通つうがった陋ろうあく悪な分子を一点も含んでいなかった。余は固もとより政党政治に無頓着むとんじやくな質たちであつて、今の衆議院の議長は誰だったかねと聞いて友達から笑われたくらいの男だから、露西亞に議会があるかないかさえ知らない。したがつてこの談話には何らの興味もなかった。それで、あんまり長いから、談話の途中で失敬して家うちへ歸つてしまった。これが余の長谷川君と初対面の時の感想である。

それから、幾日か立つて、用が出来て社へ行つた。汚きたない階はしご子だ

段んを上がつて、編へん輯しゅう局きよくの戸を開けて這はい入ると、北側の窓まど
ぎわ際に寄せて据すえた洋机テーブルを囲んで、四五人話しをしているもの
 がある。ほかの人の顔は、戸を開けるや否やすぐ分つたが、たつ
 た一人余に背中を向けて椅子に腰をおろして、鼠ねずみいろ色の背広を
 着て、長い胴を椅子の背から食はみ出ださしていたものは誰けんだか見
 当うがつかなかった。横へ回つて見ると、それが長谷川君であつ
 た。その時余は長谷川君に向つて、「ちよつと御訪おたずねをしようと思
 うんだが」と言い出して、まだ句を切らないうちに、君は「い
 や低気圧ていきあつのある間は来客謝絶だ」と云つた。低気圧とは何の事
 だか、君の平生を知らない余には不ふ得とく要領ようりょうであつたけれど、
 来客謝絶の四字の方が重く響いたので、聞き返しもしなかつた。

ただ好い加減に頭の悪い事を低気圧と洒落しゃれているんだろうぐらいに解釈していたが、後あとから聞けば実際の低気圧の事で、いやしくも低気圧の去らないうちは、君の頭は始終懊おう惱のうを離れないんだという事が分った。当時余も君の向うを張って来客謝絶の看板を懸かけていた。もつともこれは創作の低気圧のためであつたけれども、来客謝絶は表向き双方同じ事なんだから、この看板を引き下ろさせるだけの縁故も親しみもない両人は、それきり面談をする機会がなかつた。

ところがある日の午後湯に行つた。着物を脱いで、流しへ這入ろうとして、ふと向うむきになつて洗っている人の横顔を見ると、長谷川君である。余は長谷川さんと声をかけた。それまではまる

で気がつかなかった君は、顔を上げて、やあと云った。湯の中ではそれぎりしか口を利きかなかった。何でも暑い時分の事と覚えてゐる。余が身体からだを拭ふいて、莫塵ごぢの敷いてある縁先で、団扇うちわを使つて涼んでゐると、やがて長谷川君が上がつて来た。まず眼鏡をかけて、余を見つけ出して、向うから話しを始めた。双方とも真まっば赤裸だかのように記憶している。しかし長谷川君の話し方は初対面の折露西亞の政党を論じた時と毫ごうも異ことなるところなく、呂りよおん音おんで落ちついて、ゆっくりしているものだから、全く赤裸はだかと釣り合あわない。君は少しも顧慮こりよする気色けしきも見えず、醇じゆんじゆん々じゆんとして頭の悪い事を説かれた。何でも去年とか一度卒倒して、しばらく田端たばたへん辺で休養していたので、今じゃ少しは好いようだとかいう話であ

った。「それじゃ、まだ来客謝絶だろう」と冗談じょうだん半分に聞いて見たら、「まあ……」とか何とか云う返事であつた。「それじゃ、行くのはまあ見合せよう」と云つて分かれた。

その秋余は西片町を引き上げて早稲田わせだへ移つた。長谷川君と余とはこの引越のためますます縁が遠くなつてしまつた。その代り君の著作にかかる「其面影そのおもかげ」を買つて来て讀んだ。そうして大いに感服した。(ある意味から云えば、今でも感服している。ここに余のいわゆるある意味を説明する事のできないのは遺憾いかんであるが、さくぶつ作物の批評を重おもにして書いたものでないからやむをえない。)そこで、手紙したたを認めて、いささかながら早稲田から西片町へ向けて賛辞を郵送した。実は脳病が氣の毒でならなかつたから、

こんな余計な事をしたのである。その当時君は文学者をもつて自
ら任じていないなどは夢にも知らなかつたので、同業者同社員
たる余の言葉が、少しは君に慰藉いしやを与えはしまいかという己惚うぬぼれ
があつたんだが、文士たる事を恥ずという君の立場を考えて見る
と、これは實際い入らざる差し出た所為しよゐであつたかも知れない。返
事には端書はがきが一枚来た。その文句は、有難ありがとう、いづれ拝顔の上
とか何とかあるだけで、すこぶる簡単かつあつさりしていた。ち
つとも「其面影」流でないのには驚いた。長谷川君の書に一種の
風韻ふういんのある事もその時始めて知つた。しかしその書体もけつし
て「其面影」流ではなかつた。

それから、ずっと打絶えた。次に逢あつたのは君が露西亞ロシアへ行く

事がほぼ内定した時のことである。大阪の鳥居君が出て来て、長谷川君と余を呼んで午餐ごさんを共にした。所は神田川かんだがわである。旅館に落ち合つて、あすこにしよう、ここにしようと評議をしている時に、君はしきりに食い物の話を持ち出した。中華亭とはどう書いたかねと余に聞いた事を覚えている。神田川では、満洲へ旅行した話やら、露西亞人に捕つらまつて牢ろうへぶち込まれた話をしていた。それから、現今の露西亞文壇ぶんだんの趨勢すうせいの断えず変つてゐる有様やら、知名の文学者の名やら（その名はたくさんあつたが、みんな余の知らないものばかりであつた）、日本の小説の売れない事やら、露西亞へ行つたら、日本人の短篇を露語に訳して見たいという希望やら、いろいろ述べた。何しろ三人寝そべつて、二三時

間暮らしていたのだから、ずいぶんゆっくり話しもできた。最後にダンチエンコのために宴会をやるつもりだから出席してくれろという事と、それから物集もずめの御嬢さんを、自分がいなくなったら托したいという二件を依頼した。それで分かれた。

最後に逢ったのは、出立の数日前ぜんいとまごい暇いとま乞いに來られた時である。

長谷川君が余の家へ足を入れたのはこれが最初であつてまた最終である。座敷へ通つて、室内を見渡して、何だか伽藍がらんのようだねと云つた。暇乞のためだから別段の話しも出なかつたが、ただ門弟としての物集もずめの御嬢さんと今一人北国ほっこくの人の事を繰り返して頼んで行つた。

一日越えて、余が答礼に行つた時は、不在で逢あえなかつた。見

送りにはつい行かなかつた。長谷川君とは、それきり逢えない事になつてしまった。露都ろと在留中ただ一枚の端書はがきをくれた事がある。それには、弱い話だがこつちの寒さには敵かなわないとあつた。余はその端書を見て気の毒のうちにも一種のおかしみを覚えた。まさか死ぬほど寒いとは思わなかつたからである。しかし死ぬほど寒かつたものと見える。長谷川君はどうとう死んでしまった。長谷川君は余を了解せず、余は長谷川君を了解しないで死んでしまった。生きていても、あれぎりの交際であつたかも知れないが、あるいは、もっと親密になる機会が来たかも知らない。余は以上の長谷川君を、長谷川君として記憶するよりほかに仕方のない遠い朋友である。君の托されて行つた物集の御嬢さんは時々見える。

北国の人に至っては音信たよりさええない。

青空文庫情報

底本：「夏目漱石全集10」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年7月26日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和46）年4月～1972（昭和47）年1月

入力：柴田卓治

校正：大野晋

1999年5月12日公開

2004年2月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

長谷川君と余

夏目漱石

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>